

野上弥生子とジェイン・オースティンとフェミニズム： 二人はフェミニストと言えるか

『真知子』と『明暗』と『高慢と偏見』をめぐって

エレノア・J・ホーガン

序

本論文では野上弥生子とジェイン・オースティンの作品に見られる共通点を考察する。とくに結婚を中心とする小説、即ち野上弥生子の『真知子』と『明暗』と、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』に焦点を当て、オースティンが野上弥生子に与えた文学的影響やインターテクスチュアリティやフェミニスト理論と言った観点から比較する。

フェミニストという言葉の意味は研究者によって異なる場合があるが二人の作品は共にそれぞれの時代の女性問題への関心に基づいた、興味深いものであると私は思う。私がこの発表で追究するのは、この二人の作家がフェミニストであるかどうかという問題である。

まず、最近の比較文学の研究方法の動向として、影響理論に対するインターテクスチュアリティ理論の優勢を紹介したい。

次に野上がオースティンの『高慢と偏見』を読んだ証拠を示す。そして、インターテクスチュアリティとフェミニスト理論を使って、『真知子』と『高慢と偏見』を比較検討する。その際、ジェイン・オースティンと野上弥生子のそれぞれの時代の女性問題にも注目する。野上の最初の作品の『明暗』も考察の対象にいて、インターテクスチュアル関係があったことを示す。そして、影響と、このインターテクスチュアル関係が、二人がフェミニストであったという結論に通じるものであることをしめす。

影響とインターテクスチュアリティの説明

最近のアメリカの比較研究では、影響の理論は使われなくなってきている。影響の理論を使う場合には、時間的に前の作家の作品を後の作家が読んだかどうかをしらべなければならない。影響に関して一番重要なことは、作用である。作家Aから作用を受けるのは、作家Aの後に登場する作家Bである。つまり、影響関係においては、時間的な順序が存在するのである。適当な証拠が発見できるなら、影響という理論を使うのは不可能ではない。例えば、野上弥生子がジェイン・オースティンから影響を受けたとよく言われる。それは正しい。しかし、それは野上が他の作家を真似た作品しか書けなかったという意味にならないことに注意すべきである。影響の理論をそんなに簡単に利用するわけにはいかない。

影響の理論は、以前は大変人気があったが、1960年代にジュリア・クリステイヴァがインターテクスチュアリティという言葉を使い始めてからの人気は衰えた。インターテクスチュアリティでは、作用は必要ではない。ある作家が他の作家に影響を与えていなくても、両者の作品間に共通点があることがある。クリステヴァが言うように「一つの言葉(テキスト)は多くの言葉(テキスト)の交点である。そこには少なくとも、もう一つの言葉(テキスト)が読める。」ロランド・バルトによると「テキストとは、色々なテキストが混ざり合い、ぶつかり合う多次的な空間である。」だから、影響の概念にはインターテクスチュアリティが入っているが、逆にインターテクスチュアリティの概念には影響の概念が入っていない。したがって、オースティンと野上弥生子の間に影響関係があったという証拠がなくても比較研究は可能である。

証拠

野上弥生子とジェイン・オースティンの場合、確かに影響があったという証拠があるので、この二人の作家に関しては、影響の理論には何の不確実性も問題もない。二人の間に影響があったという証拠がある。例文として、野上の日記からの引用は次のように書いてある。

大正十五年七月三十一日：「高慢と偏見」を校正する。ペンバリの邸をエリザベスが見物に行っているとダーシーに出逢うところである。今まで色んな角度で屈折していた二人の関係がいよいよ最後の了解に達しようとする前の最も興味ある場面である。

いつも思うことであるが、長編を書くならこのイキでいかねばならぬ。

これで行けば本格小説（で）あると共に、よき意味での通俗小説ともなり得るのである。こういうとりあつかい方で一つ長いものを書いて見度い。

大正十五年八月一日：昨日の校正の続きからオースティンが読んで見度く原文でその先をざっとよんでしまった。先に一度よんだことがあるのでよくわかる。ゼーンとエリザベス、ミスベネット、ベングリとダーシー、コリンズ、なんというあざやかな性格描写であろう。これを二十三や四歳で書いた、二十年も文筆にたずさわっていてまだ本当の作品一つ書けない自分が恥しい。

日記からの一番重要な引用は野上の1927年のものである。

昭和二年十二月十四日：オースティンをまたよむ。よむたびに賞賛のまさるのはこの小説である。これこそ一つの自然である、最も虚飾もない、最も平坦な素顔の人世である。（省略）せめてアースティン位は（と）おもっていた今度の長編もとても及びもつかぬ気がする。これほど行けば、万歳であるが。

野上が『真知子』を書き始めたのは、昭和二年の日記の同じ頃だと考えられる。

『真知子』と『高慢と偏見』

『真知子』と『高慢と偏見』の登場人物を比較すると、色々な共通点が見える。

『真知子』と『高慢と偏見』

真知子	——	エリザベス	ヒロイン、主人公
河井	——	ダーシー	ヒロインと結婚する
関	——	ウイカム	魅力があるけど、悪い人
山瀬	——	コリンズ	馬鹿馬鹿しい
辰子	——	シャーロット	結婚相手を選ぶ時にだれでもいいと言う

野上弥生子は『真知子』を創造しながら、オースティンのエリザベスを考えていたと思う。真知子とエリザベスは独立心の強い、自分自身で何でも考える、利口な若い女性である。二人の主人公の性格が似通っている点は自分独自の意見を言うことである。二人の主人公の独立心の強さを示す代表的な例はお金持ちの求婚者を拒絶するしせいである。家族を失望させるにもかかわらず、真知子もエリザベスもこの結婚を絶対拒否すると確信している。

続いて、上に書いてあるリストのように、他の登場人物も似ている役割をしていることに注目する。これについては国学院大学のWalpurgistにある「野上弥生子とジェイン・オースティン：影響、インターテクスチュアリティ・フェミニスト理論」と言う論文にもっと詳しいことを書いたので参照されたい。

インターテキストュアリティ

ジェイン・オースティンは、1787年ごろから書き始めた。ちょうどそのころ、メアリー・ウルストンクラフト(1759—1797)は、フェミニズム(男女平等)の作品を発表した。1792年に「女性の権利の擁護」のフェミニスト論文が出版されていた。メアリー・ウルストンクラフトは、「女性の権利の擁護」において、次のように、主張している。女性は男性に経済的にも、精神的にも隷属する立場に置かれているが、それは今までの教育と環境のせいである。女性もちゃんとした教育を受ければ、男性と同じように独立した存在になることは可能である。

ジェイン・オースティンにメアリー・ウルストンクラフトがいたように、野上弥生子の同時代に平塚らいてうがいた。らいてうが『青鞥』を創刊したときのマニフェストの中に、ウルストンクラフトと同じように、隷属した地位に置かれた女性の復権を主張している。ウルストンクラフトは英国の女性開放思想の先駆者であるように、平塚らいてうは日本のフェミニズムの先駆者であった。

平塚らいてうは、いわゆる女性美德、従順や犠牲は、女性を抑圧したいと思う男性によって、作られたもので、女性の本来の性格ではないと言っている。1913年4月のエッセイ「世界の婦人たちへ」の中で、らいてうは結婚について批判的な意見を次のように述べている。「結婚は婦人にとって、唯一絶対の生活の門戸で、母たることのみが婦人の天職の総てであろうか、私どもはもうこんなことを信ずることができなくなっております。結婚をほかにしても婦人の生活の門戸は各人個々別々も限りなくあらねばならず、婦人の天職は良妻賢母をほかにしても各人個々別々に無限にあらねばならぬのではないのでしょうか。そしてその選択の自由は各自の手に握られているものではないのでしょうか。」

結論

さて、次に二人の間にインターテキストュアル関係があったかどうか見ていこう。野上弥生子の『真知子』とジェイン・オースティンの『高慢と偏見』は結婚というテーマを共有している。特に、女性がどのようにして、結婚相手を選ぶかを問題にしている。またどちらのヒロインも、因習的な結婚観を発し、自分自身で考えて、相手を選ぼうとしている。しかし、すでに指摘されたように、野上弥生子はオースティンの『高慢と偏見』を読む前に結婚観をテーマにした作品を書いている。その一つ『明暗』と言う短編小説である。野上はこれを1906年に書いた。これは彼女の最初の作品である。だが、これが出版されたのは、彼女が亡くなって三年後、1988年のことだった。

『明暗』の主人公の幸子は画家である。彼女は、岡本という男性からの求婚を断った。岡本の質問に何も答えないことで油画を描くことが結婚より大切だいう意志表示をしたのである。この点、同じ野上弥生子の作品『真知子』の主人公の真知子と少々異なる。真知子は幸子よりも自分自身をしっかり持っており、明確に意見を表明している。そのため、読者は幸子より真知子の人物像をはっきり思い描くことができる。野上の筆力が向上したのだと言えよう。岡本は、幸子にとって油絵はそれほど大切なものではないだろうと考えている。幸子によると、結婚を拒んだ理由は、岡本の奴隷になりたくなかったからである。そして、「画を良人にして、生涯を独身で居ると誓う」と幸子は考える。

それから六年後、幸子と一緒に住んでいた兄が婚約してから、幸子は自分の世界が変わって来る事をはっきり感じるようになる。幸子は「絶海の孤島に流たくせられた帝王の胸のように」と感じている。岡本がもう一度幸子の家に尋ねて来ると聞くと、幸子の気持ちがおかしくなってくる。幸子は、結婚した方がいいと思い始める。はつきりそれを口にするのではないもので、病気になる、頭痛で眠れなくなる、などの症状に現れてくる。そして、自分の仕事はそれほど大切なものではないような気がしてくるのである。たとえば彼女は、きれいだと思っていた絵を急に美しく感じなくなる。「雲が鳥に成る、人が木に成る…山が狸大入道に変わる。自負の色眼鏡を取って見た画の真価が、眩ける両眼の底を決めて会釈もなく弱れる心をつく。」幸子は苦しくなり、自分の人生を無駄にしたと考えるようになる。「こんな化物ばかり書きちらして、画を生命になんてよくも言った。大変な生命だ…情けない生命だ！」と考え

た。六年前に岡本が言った、油絵は一時の興味だという言葉が正しいと分かったと、幸子はその言葉に大きなショックを受け、自分を激しく責める。

しかし岡本がもう一度プロポーズした時も、幸子は再び拒否する。やはりなにも言わないのである。その理由は、今回は幸子自身にも、また読者にもわからない。ひょっとすると、「自分の弱さと果敢さを危く悟りかけた今の身では…」を他の人に見せないようにするために、断ったのかもしれない。最後には、幸子は泣いている。彼女がどうなるか、それは読者にもはっきりわからない。

野上弥生子は1906年の終わりに『明暗』を書いている。これに対する漱石の批評手紙は1907年の1月17日のものである。さらに、オステインについての漱石からの葉書は1907年の6月26日のものである。学者の田村道夫によると、野上が漱石からオステインの本を借りていたのは1907年の1月と6月の間である。したがって、野上弥生子の『明暗』は『高慢と偏見』を読む前に書かれたものだと言える。

このことは非常に重要である。オステインを読む前に若い女性の結婚観が表われているので、野上弥生子の作品の興味深い点である。二人の作家の間に成り立っているのは、影響関係ではなくインターテクスチュアル関係であるに違いない。主人公が同じ男性に二回求婚されるというエピソードは、オステインからの影響ではなくて、野上弥生子の創造であった。若い女性が自分の将来を自分で決めるべきという事を、野上弥生子とジェイン・オステインはそれぞれ小説に表現している。『明暗』では、主人公は結婚よりも仕事の方が大切だと考えて、結婚しなかった。再び求婚された時にもまた拒否したことは、正しかったのかどうか、それは幸子にも読者にもわからない。幸子の将来についての確信はないである。

二十二年後の作品『真知子』では、主人公の真知子はよい将来を創造できている。真知子は関を捨てて河井と結婚する予定になるが、それには男も女も平等な、よい夫婦になりそうだという予感がある。このような幸せな結末としたのには、オステインからの影響があったかもしれない。オステインの描く主人公エリザベスも、明るい将来を予想している。一方結婚問題に関する野上弥生子の他の短編小説——例えば、『紫苑』1908年と『柿羊羹』1908年——は、暗い話である。これらの作品の主人公は悪い運命を背負っており、結婚相手に恵まれず、結局一人は自殺し、もう一人は自殺するかもしれないという結末なのである。野上弥生子がこのような小説を書いているのは、結婚制度に対する批判であると考えられるだろう。

つまり、『明暗』を見ると、野上弥生子はオステインを読む前にも結婚に対する意識が強く、それが『高慢と偏見』を読んだ後にもつづいたのである。従って、野上が結婚問題を扱ったのは、オステインの影響だとは言い切れない。むしろ、二人は共通する関心を元々持っていたのだと言えるだろう。

それぞれのヒロインの考えは、女性は独立すべきであるというものだが、これはそれぞれの作家が生きた時代の風潮の反映とも考えられる。オステインが執筆し始めた18世紀の終わりから19世紀の始めにかけて、メアリー・ウルストンクラフトによる、哲学的な女性観が現れ始めた時代であった。一方、野上弥生子が小説を書き始めた明治の末から、大正、昭和にかけては、大正デモクラシーが広まり、平塚らいてうなどによる青鞥社の運動が起こった時代だった。

野上弥生子とジェイン・オステインは、ともに女性の問題を表現している点が興味深い。両作家は、女性は教育を受けることは重要であると考えていたし、女性も自分自身で何でも決めるべきだと考えていた。二人とも、早くから女性の権利を擁護する姿勢をとっていた。したがって、野上弥生子もジェイン・オステイン共にフェミニストあるいは先駆的と呼べるだろうと私は考えている。